

おお大勝利

平成 25 年度山東サッカー部報第 14 号 (7 月 24 日)

サッカー部保護者の皆様、OBの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

日大Bに劇的「逆転サヨナラ勝ち」

7 月 20 日 (土) Y2A リーグ第十節の日大山形B戦が県総合運動場 (べにばなスポーツパーク) 第二運動広場 (人工芝) にて行われました。山東は前節山形中央Bと戦い敗れはしたものの光明を感じることができたので、この試合でさらなる上昇気流を感じたい。ただ、相手の日大山形Bは、3 年がいた時もやっと引き分けに持ち込んだ難敵。**Bチームではありますが、圧倒的な縦への迫力と驚異のセットプレー力というチームカラーは、しっかり刻みこまれている。**

予定通り 9:30 キックオフ。すると、やはり日大のプレスをかわせず、山東陣地の攻防へと押し込まれる。山東は、**前線に強いフィジカルを持つクネクネドリブルのエイジを初先発**させ、ここ 2 試合 1 列目で先発のコウタを 2 列目のサイドアタッカーで起用するものの、その効果がなかなか現れない。日大は前線の 1 年生のイキが良く、裏へ走ったり足元でもらってぐいぐいとドリブルで前進したりと、山東DFを苦しめる。**山東DFは裏一発でやられるのを警戒しオフサイドラインを下げ続け、バイタルエリア (DFラインとMFラインの間) を空けてしまっているが、そのスペースを日大FWに的確に使われる。**よく「**スペースは、ただそこにある、のではなく、自分たちで作るものだ (スペースは作って使う)**」と言われますが、さすが日大の前線！と思わせる。前節大絶賛を受けた 2 年CDFアカガワさんも対人 (1 対 1 の対決) で振り回されるシーンが多く、**戦列復帰の 1 年CDFタツルに助けられる**こと多し。すると、開始 4 分ほどで、右サイドで相手に時間を与える甘い対応をしたのを咎められ、簡単にセンターリングを許し、そのボールを今度はニアサイドで体を預け反転した相手選手に対してCDFが (左足でそのまま打たれるのを防ぐため突っ込み) 相手よりも外側に行くという考えられない対応をし、ゴール真前で簡単にドフリーにしまい、**失点**。この失点シーンですが、相手選手が体を預けてきた以上そんなにニアサイドに突っ込みすぎる必要はなく、打たれるかもしれないがあくまでその可能性は二次的でありファーストチョイスは体を預けての反転であると解釈すべきシーン¹。明確な判断ミス (相手をよく観ないで、状況をよく考えないでやみくもに体を動かすことで起こるミス) でした。いや、**そもそも判断の誤りの根底には、日頃からフェイントのない素直なプレーの横行するプレー環境というものがある。フェイントが多用される「いつどのようにだまされるかわからない」プレー環境であれば、相手の意図を相手の体の使い方の全体から推し量る慎重な対**

¹ 相手選手はゴールよりも外側＝ゴールよりも右側にいたわけで、仮にシュートブロックをしに行ってもその選手以上に外側に行くのはいくらなんでも行きすぎです。日頃よりディフェンスにおいて**角度を守ること (ボールとゴールの中心を結んだライン上に位置し続けること、または、寄せに行った角度を守り相手の切り返しを狙う位置取りをし続けつつ奪いに行くこと、その際くれぐれも回り込んで切り返されることがないようにすること)**の重要性を口酸っぱく言っておりますが、定着にはまだまだということなのでしょう。

応が身につくですが、なかなかそこまでの練習レベルになれない山東が強豪チームと対戦すると、フェイントに簡単に引っ掛かって情けない思いをすることが多い。**問われているのは1フレーではなく、トレーニング環境全体**なのでしょう。さて、気を取り直して、と無理にでも元気を出さなければいけない。すると、10分ほどしてか、**再三中へ（内側へ）ドリブルしていた左サイドのカットが突然縦にドリブルを仕掛け、スピードはさほどではないものの独特のリズムで相手を振り切ってセンターリング、それをニアサイドで体を投げ出したエイジが頭で合わせ、同点に**。この得点、後藤報道局長が管理されている山東サッカー部OB会HPで確認すると、結構きれいなダイビングヘッドだったように見える（山東ベンチからは遠くよく見えませんでした）。エイジが先発出場の期待に応える得点を決め、山東の意気上がる。しかし、同点シーンから間もなくでしょうか、CKのゴチャゴチャからクリアされたボールは、勢いなくショート、しかもゴール真前の前方に蹴られているため、相手チームの折り返しと見間違ふほど。それを呆気なくダイレクトで合わせられ、**勝ち越し点を献上**。ベンチに鎮座されました清野OB会長が2失点ともミスだ、と試合後仰られた、レンズ越しに試合を観る報道局長はその意味がわからなかった、との記述がHP写真付属コメントにありましたが、2失点とも確かにミス。しかも、2失点目もクリアが中にショートするというこれまでの試合で繰り返されてきたミスであり、上述の通り、**問われているのはこの1フレーだけではない**。その後も、日大の攻守にわたるパワフルなプレーに押され劣勢、1対2でハーフタイムへ。

負けが込んでくると、やられても「やっぱりな（いつもの通りだな）」という後ろ向きの反応になりがちで、「なにくそ」と発奮し今まで以上の力を発揮しようとする前向きさが影をひそめがち。そんな気持ちに監督自らなりながらも、「先制され、『またか』と落ち込んだが、同点にしたときは『これからだ』と思っただろ？ いまは突き放され落ち込んでるけど、同点にしたらまた元気出るよ」というような、選手を励ましながら自分をも励まし、後半に向かわせました。後半も日大優勢は変わらず。しかし、後半の前半は日大の攻撃をうまくいなしながら丁寧にパスをつないだり、トリッキーなボール保持からエイジが抜け出しゴールに迫るなど、決定的なチャンスとまでは言えないが、前半よりはゴールに迫ることができている。校長も後半から駆け付けた模様で、熱い声援というか熱い指示を出して、応援サイドから選手を激励してくださる。すると、後半の中盤くらいに、またもやエイジがやらかしました！ **左サイドからクネクネドリブルでゴールに直進し、ペナルティエリアのライン手前くらいで右足を振りぬいたら、低く速い弾道でニアサイドのゴールネットに突き刺さり、再び同点にする**。エイジ様々の一日となりました。選手もエイジに手荒い歓迎、ベンチのバックアップメンバーも「さすがエイジ」ではなく（そうはまだなっておらず）、「エイジやっちゃった」といううれしい驚きの反応を示す。**やはり、ゴールに向かってフレーし、積極的に打つ、自分でゴールを決めるという積極的な、えてして我の強いくらいの気持ちを持つことがいかに重要かを、エイジがフレーで示してくれる**。これで2対2。さあ山東、これからです。しかし、試合が動いてから発奮したのは押し気味に進めていながら同点にされた日大Bだったのは残念なところ。コーナーフラッグ付近の深いところにボールを運び、そのままセンターリングか、はたまたCKを得てセットプレーでしとめる常套手段を愚直に続けてくる。特に後半40分を過ぎたところで左からセンターリングを上げられ、ゴールに近いファーサイドでヘディングされたシーンは危なかった。日大Bからするとヘディングを外した（競り合いに勝てなかった）、というまとめになっているかと思いますが、遠目に見ても右SBのヨウタがしっかり相手に体を預けており、十分な体勢でヘディングさせていなかった

た。好プレーというか、基本通り、当たり前のプレーに助けられる（もちろん、当たり前のことを当たり前にやることの重要性を理解した上ではありますが、当たり前のプレーを好プレーとまとめてはいけないと思いますので）。その後、44分くらいで、今度は右からセンターリングを上げられ、**中ではなぜか、日大の選手がドフリー²**。「あっ、やられた！ 引き分けになるかという期待を持たせてもらったが、やはり勝負強いチームにやられるんだよな〜」という思いが一瞬にして心を支配する。しかし、この重要な場面でヘディングシュートが枠に飛ばず、事なきを得る。ホント、助かりました。すると、勝負所で好機を逸すると災いをもたらすという勝負の法則が、山東に有利な形で現実のものとなる。**アディショナル・タイムに右SBヨウタが速い軌道のセンターリングを上げると、ジャンプ一番、エイジがヘディング。ボールはふわりと日大ゴール右ポストに当たり、そして内側に跳ね返ってワンバウンドし、ふわりと逆サイドのネットに吸い込まれる。**何と、何と、三度エイジ！！ エイジのハットトリック！！！！ いやはや、エイジ祭り。後藤報道局長の表現を借り得れば、「**逆境のサタン（悪魔） エイジ誕生**」³。そして、ほどなくタイムアップ。

劣勢を強いられたチームが粘り何とか勝利をものにするという、山東らしい勝利となる。しかも、新人チーム初勝ち点ゲット、しかも3ゲット。確かに、全員でしっかり守り、全員でボールをつないだ全員の勝利とまとめるのは正しいまとめですが、ゴールゲッターが活躍すると勝てるというか、点を入れると勝てる（点を入れないと勝てない）ということを実感させられる試合となりました。**昨年卒業したOBゴメのお父様**が、昨年まで夜の会で盛んに「サッカーは守っても点を入れなきゃ勝てない。点を入れる選手が一番偉いんだよ〜。」と力説しておりましたが、この日ほどその発言の説得力が感じられる日はないものとなりました。そのエイジですが、2得点目に顕著でしたが、彼が自主的なキック練習というかシュート練習をしていたひたむきさが結果となって現れました。それまでエイジは、ボールをこねくり回すことはできても、本当の意味でゴールに迫ることができなかつたばかりか（そうした意味でドリブルもまだまだだつたばかりか）、キックが全然できず、仮にゴールに迫っても可能性を感じるシュートが全然打てませんでした。しかし、**2年生になり、自主的にボールを強く蹴る練習をしているシーンをしばしば見かけましたが、とうとう努力が実を結びました。**翌日曜日、河川敷まで練習に駆け付けた後藤報道局長にエイジの活躍に話を向けると、「だから言ったべ〜」の一言。そうなんです、ドリブラー好きの後藤さんはずっとエイジに目をつけ、目をかけていたのです。後藤さんからしたら、「今野はやっとエイジの可能性に気づいて先発させたか」という気持ちなのでしょう。さてこの試合、もちろんエイジだけでなく、**1年生ボランチのムンタリことリョウタの守備における貢献**も見逃せません。まだまだ攻撃面、つなぎの面では2年ボランチのクリロンのレベルに全く及びませんが、体を張った守りで貢献してくれました。こちら辺は同じく先発した1年カツミがそろそろ見習ってほしいところです（まあ、彼もこの試合、スライディングしたり、浮き球に対して足を上げずに頭から行ったりと、「体を張る」という点において若干の努力はうかがえましたが）。

とまあ、ここまでは好材料を多く書いてきましたが、試合当日の解散のミーティングでは、選手・斎藤GKコーチ・顧問今野の口から出たのは「呆気ない失点があり、内容的には山形中央B戦の方が良かったのではないか」という反省。確かにそうなんです。**山東がしぶとく強豪に勝っていくために今後重要になってくるのは、点の取り合いで勝つ（くらい攻撃**

² このシーンは、なぜ真ん中でドフリーになったのか、もっとよい対応はできなかったか、よく話し合った方がよい場面でした。

³ サタンにしてもなぜ逆境か、よくわかりませんが、ビハインドの試合で活躍する、という意味なのでしょう。

力を身につける)のではなく、相手の攻撃を全員守備でしぶとく凌いで少ないチャンスをも
のにする、そういう粘り強いサッカーなのです。そうした意味で、この試合、喜んでばかり
いられない試合ではありました。ともかく、**次も勝った上でしっかり反省したい**ところ。や
はり勝つこと（成功体験）が上達への近道です。負けることが糧になることはありますが、
必ずしも負けが糧にならないことは、負け続けるだけで這い上がれない弱小チームが多いこ
とからもわかる⁴。次も応援よろしくお願ひいたします。

**8月4日（日）Y2A第十一節 モンテユースB戦 @天童第二（人工芝）or 天童サフグ
ラウンド（スタジアム東裏の天然芝） 時間未定**

場所、時間が決まりましたら、選手・HPを通じましてすぐご連絡いたしますが、その日に
モンテB戦があることは間違いありません。

⁴ その意味で、負けた時重要なのは、この負けが糧になる、と自動的に考えないこと。当事者の心構え
として重要なのは、「負けが糧になる」と思うことではなく、今後「負けを糧にする」決意を固めること。
後に、「あの負けがあったから頑張れた」と言えるよう頑張ることでしょう。